日ロ交流

発行: 特定非営利活動法人日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page: http://www.nichiro.org
〒106-0041東京都港区麻布台3-4-14
麻布台マンション401号
Tel : 03 (5563) 0626　Fax: 03 (5563) 0752

NPO日ロ交流協会第22回（通算58回）通常総会開催

内堀 學

2022年3月26日（土）10:30より新橋生涯学習センター305号室にて当協会の第22回通常総会が開催され正会員18名が出席した。冒頭朝妻会長より協会活動の現状と今後の展望に関し簡単な挨拶と開会の宣言が行われた。

総会の議長には定款26条に基づき出席正会員の中から服部副会長が選出され、続いて定款27条に基づく定足数の確認があり、正会員出席者18名、書面表決者64名、委任表決者7名の計89名となり、正会員数176名の1/3（59）以上であることが確認され、総会の成立が確認された。定款30条に基づく議事録署名人には、内堀専務理事、島山事務局長が選任された。

続いて議案審議に移り、第1号議案「2021年度事業報告」、第2号議案「2021年度収支決算報告」、「2021年度会計監査報告」、第3号議案「2022年度事業計画」、第4号議案「2022年度収支予算案」、第5号議案「理事及び監事の選任」が審議され原案通り承認され、通常総会は11時15分に終了した。

2021事業年度では長引くコロナ禍により予定されていた多くの日ロ文化交流事業計画の実施が中止見送りなったため前年度に引き続き収支が赤字となり年度期間収支-195,632円、次期繰り越し収支が1,031,472円となった旨報告された。

2022年度事業計画では文化交流、ロシア語教育に重点をおき、従来の事業活動を継続しながら、協会活動の魅力を高め、次代の活動をになう若手会員の確保、役員への登用により、あらたなスタイルでの活動の実践に努める旨報告された。

2022年期間収支ではコロナ禍の影響で収益の柱である1月の他交流2団体と共催の新年会が前年度に引き続き見送りになったこともあり、-349千円の赤字、繰り越し収支682千円を見込む。ただ、2月末以来のロシアとウクライナとの紛争が長期化しており、今後コロナで停滞している事業活動の正常化には時間を要することが懸念される旨報告された。

総会議事終了後、2012年以来理事、副会長、そして2020年12月の前有馬会長ご逝去後会長の重責をお引き受け頂いてきた朝妻会長の任期満了による会長理事職の退任が報告され、花束贈呈とともに出席者全員より長年の功績に対し謝意がしめされた。

朝妻会長には任期満了後も当協会顧問として引き続きご指導ご協力頂く予定だ。なお、次期会長には、4月1日開催される新理事による理事会で服部現副会長理事が選任される予定である。

新たに理事に選任された秋元氏、武川氏には今後とも役員の立場から協会活動にご協力ご尽力頂きたくよろしくお願いいたします。

総会終了後の恒例の懇親会はコロナ禍の影響で先年度に引き続き開催が見送りとなった。　（専務理事）

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中！

水曜：初級1A-1（19：00～20：00）初級1A-2（20：05～21：05）、土曜：上級（10：00～11：30）
オンライン準中級（月曜18：00～19：00）、日曜ゼロからクラス（18：00～19：00）、テーマ別（日曜4月17日、24日、5月8日10：00～11：00）
＊事務所では少人数で実施し、消毒液、パーテーション等用意して十分配慮しておりますが、受講の皆様はマスク着用、換気、手洗い等、ご協力をお願いいたします。（緊急事態宣言の際は原則オンラインとなります。）プライベートレッスンも実施しておりますので、ご希望の方はご相談ください。
ベテラン講師陣がお待ちしております。
コルド・ナターリア（初～中級）、イローナ・パルフェノワ（中～上級）、タチヤナ・スニトコ（初～上級）、ウラジーミル・ボロビエフ（初～中級）
＊事務所での教室も再開しています。
お問合せ：日ロ交流協会事務局
TEL:03-5563-0626　e-mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。
振込先:郵便口座00160-9-66486、加入者：日ロ交流協会
連絡先:日ロ交流協会事務局E-Mail:nichiro@nichiro.org
Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

日本語学習者とのオンライン交流会withニージニー・ノブゴロド「虹の会」

安部 花子

2月26日、Zoomミーティングにて開催された、ニジニー・ノヴゴロド日本センター主催の第18回日本人・ロシア人交流会「虹の会」に参加しました安部と申します。私自身、コロナ禍を2年過ごしているにも関わらず、オンラインミーティングというものが今回初体験でした。接続や設定に多少のアクシデントはあったものの、非常に楽しいひとときを過ごすことができましたのでレポートします。

この交流会は、ニジニー・ノヴゴロド在住の日本語学習者と日本人の交流を目的としたオンライン交流会です。今回の参加者は計24名（ロシア人12名、日本人12名）で、日本人・ロシア人の数は半々。前半約30分はZoomの投票機能を用いた四択クイズ、後半の1時間は4～5人のグループに分かれたグループディスカッションです。今回のお題は「料理」。自分の国のおすすめ料理の紹介・相手の国の料理に関する質問をテーマにトークします。

日本語学習者との交流会どころかZoomミーティングすら初めてだった私は、大変な張り切りようで準備をしました。おすすめの日本料理のプレゼン資料、ロシア料理への質問も事前に完璧に用意。しかし交流会の開始直前にPCがフリーズ状態になってしまうというアクシデントが…。こちらだけが顔出しをせずに参加するのは何となく失礼な気がしてしまい、泣く泣く主催者に参加不可の連絡をしたところ、顔出し無しでもよいので携帯電話から是非ご参加くださいとの返信が！参加してみると、顔を出したくない人はアイコン表示をしており、想像よりもフランクな雰囲気で参加できる会だということが分かりました。

前半のクイズでは、ロシア料理・日本料理に関する四択クイズ。主催者がクイズを画面に表示し、全参加者が手元のボタンで回答していきます。各参加者が問題なく音声を受信できているかの確認にもなるし、いきなりグループトークでは緊張してしまいがちな参加者への配慮も感じられます。ごく簡単なクイズかと思いきやマニアックな問題もあり、日本料理のお題にも関わらず不正解だった問題もありました。

後半はグループディスカッションです。事前のアンケートで伝えてはいたものの、実はロシア語学習の経験が一切無い私は非常に不安だったのですが、同じグループになった日本語学習者のお二人は全く問題なく日本語を話されていたため、日本人と話す感覚で会話を楽しむことができました。参加する前は、日本語のネイティブスピーカーとして少しでも役に立てるように、正しい日本語を話さなくては、そして同時に、教科書に載っていないようなフランクな日本語も話そう、などとあれこれ考えていましたが、実際に始まってしまうともはやそれどころではありません（笑）。そんな、ある意味おこがましいような考えが吹き飛ぶくらい、今まで知らなかったリアルな視点を教わったり、会話が盛り上がるようにお互いに助け合えたりと、有意義で楽しい時間を過ごすことができました。ロシア側の参加者の皆さんもそんなふうに思ってくれていたらいいなと願いつつ、また次回の開催を楽しみに待ちたいと思います。

コラム：

ロシア連邦とソビエト連邦の違い

島山 堅蔵

2月24日のロシアによるウクライナ侵攻後、コロナ禍の世界情勢が一段と悪化した。今回冒頭でこのテーマに触れたいと思います。（記載内容はあくまで筆者の個人意見です。）

1.“ＲＩＡノーボスチ通信社/ピョートル・アコポフ署名記事「ロシアと新世界の到来　(Наступление России и нового мира)」はロシアによるウクライナ制圧が侵攻後48時間で終了することを前提に事前準備されたものだが、誤って2月26日に配信されてしまった。記事の内容からロシア政府が今回ウクライナ侵攻で何を目論んでいるのかが理解出来ることで注目されている。

記事の最後の段落には“今回達成されたこと”として以下記載がある：

大統領がどんな問題解決の責任を自分で果たしたのかの説明：

(1番目は) ウクライナはロシアに戻った。それはウクライナ国家の清算を意味するのではなく、再編成・再建され、ロシアの一部として自然な状態に戻されたこと。

(2番目は) 国家安全保障問題として、ウクライナの反ロシアの創立と西側がロシアに圧力をかける前哨基地にすることを防いだこと。

この記事はロシア人に対し“新しい時代、新しい世界の始まり。”を祝福する著者の言葉で締められていますが、幸いにして現実はそのようなことになっていません。

2.“ロシア連邦”、“ソビエト連邦”との比較

１)ソ連邦時代には、東スラブ人（ロシア人･ウクライナ人･白ロシア人）は総人口の約70%を占めていた。

国名	ロシア連邦	ソビエト連邦
面積	1,709.8万Km2	2,204.2万Km2
人口	1億4,581万人	2億9,304万人
民族	ﾛｼｱ人80%	ﾛｼｱ(50.8%)ｳｸﾗｲﾅ(15.5%)ﾍﾞﾗﾙｰｼ(3.5%)

２）1991年12月末にソ連邦が崩壊し、バルト3か国の離脱・独立が決定され、残り12か国でCIS（独立国家共同体）が設立された。これにより3つのスラブ系共和国は下記の通り、ロシア連邦、ウクライナ、ベラルーシ国家として独立した。

	ロシア人	ウクライナ人	ベラルーシ人
ロシア連邦（国内）	115,889千人	8,334(千人)	1,142(千人)
ウクライナ（国内）	2,942	37,541	248
ベラルーシ（国内）	780	16	7,900

今回のコラムの表題“ロシア連邦とソビエト連邦の違い”の意味とは：ソ連邦では東スラブ人は１つの国家“ソ連”で暮らしていましたが、崩壊後はロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人は独立した3国家に“それぞれに3民族とも”生活しています。国家間の争いは、同じ民族を巻き込むことになります。この現実を踏まえ、東スラブ人国家がそれぞれ主権国家として、各国民が平和に暮らせる日が一日も早く訪れることを願って止みません。

次回は“ウォッカについて”述べたいと思います。（事務局長）

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

《モスクワ・アラカルト69》

4年8か月ぶりのモスクワは灰色

日向寺 康雄

2月末から2週間弱、モスクワに行ってきた。夏季休暇で一時帰国中、父が倒れ介護のためそのまま残ると決めてから4年余、昨年父を見送り大学も春休みに入り一段落したのを見ての待ちに待った「里帰り」だった。アエロフロート機がシェレメチェヴォに近づき、徐々に高度を下げ厚い雲を抜けて、ふいに眼下に冬枯れの白樺林と雪解けの始まった灰色の大地が見えた時には、目頭が熱くなった。

この小旅行は、本来休息の旅となるはずだった。仕事をしながら介護する私をずっと応援し続けてくれたモスクワの「子供達」や同僚、猫達をハグし感謝を伝え、2年前に友人と買ったアパートをこの目で見て、未来について語り合う楽しいものになるはずだった。しかし出発直前に始まったウクライナへの「特別軍事作戦」が、すべてを変えた。ソ連末期から国営メディアで働いていた私は「ワルシャワ条約機構が解体され東西冷戦が終われば、NATOも当然その役割を終え、今度は欧州からユーラシアを含めた新しい安全保障の枠組みが構築される」というゴルバチョフの考えを当時連日翻訳し、その実現を信じていた一人だ。だが現実はそうならなかった。

NATOはロシアを仮想敵として東方拡大を続けた。「ゴルバチョフは西側に騙されソ連邦を消滅させた、東スラブの兄弟的価値観破壊の目論見を許せば今度はロシア連邦が崩壊してしまう」というプーチンの危機感を受け入れるロシア人は多いと思う。ロシア社会では、ソ連崩壊は「よきこと」をもたらさず、「民主化」はギャング資本主義到来につながり、かつてあった最低限の物質的豊かさや精神的余裕さえも享受できない人達が増え、治安も著しく悪化したと捉える人が少なくない。そこに現れ、生活者の切なる願いに応えたのが他ならぬプーチンだった。ただ今回の行動は、最良の選択ではなかった。とはいえ今後ロシアの歴史教科書において、彼は「英雄」と評価されるかもしれない。

モスクワの街は、以前と変わらぬ温かさと気さくさで私を迎えてくれた。表面上目立った混乱や緊張もないかわりに、いつもならこの時期、街中に溢れる冬を送り春を迎える明るい喜びやウキウキ感、国際婦人デー前の華やぎはなかった。久しぶりに彼らと強くハグしあうと、よく分かる。言葉にできない戸惑いや不安、笑顔の裏の深い悲しみがドッと私の身体に流れ込むのだ。皆、親戚や友人がウクライナにいる。知り合いが兵士として戦っている場合もある。「戦争反対」だが、当事者にとって物事そう簡単に白黒つけられるものではない。すべて陰影のある灰色なのだ。「がんばれ」と言っても何を頑張ればよいのか。私は無言で彼らをギュッとハグし返すことしかできなかった。命を賭して闘う以上、双方に自分達の「正義」がある。情報戦にフェイクはつきものだ。一方の主張だけを取り上げ人々の感情を煽り、それのみが正しいとする世論はひどく危ない。私は今回の悲劇について、双方は欧州近隣諸国やベラルーシの協力を得ながら、東スラブ人の叡智を信じ祈り、解決の道を平和的に直接じっくり模索すべきだと思っている。

（元モスクワ放送チーフアナ、現中大及び早大非常勤講師）

＊前回、68の記事の冒頭で「今年2月20日は・・・」とあるのは、「今年、2月10日は・・・」の誤りです。お詫びして訂正いたします。申し訳ありませんでした。（編集部）

国際放送史研究の戯言No016

ミハイル・コリツォフ

島田 顕

今回は、前回の文章の中で触れたロシアの作家・ジャーナリストであるミハイル・コリツォフについて書きたい。

コリツォフは、本名ミハイル・エフィモビッチ・フリドリャンド。1898年にウクライナのキエフで職人の子として生まれた。1916年からマスコミ活動に従事。1917年2月以降、ペトログラードの革命的諸事件に積極的に参加。1918年から共産党員。1918年初頭、教育人民委員会のニュース映画グループを率いた。1918年から1919年にキエフに住み、1919年から赤軍に入隊し、南部とポーランドの前線に立ち、オデッサの新聞とキエフの軍用新聞『赤軍』に勤務した。1920年からモスクワに住み、外務人民委員会の報道部門で働いた。1922年から1938年まで『プラウダ』に勤務し、基本的には政治風刺の新聞文体で働いた。ソ連で最も人気のある雑誌『アガニョーク』『クロコダイル』『ザ・ルベジョム』の創始者・編集者の一人で、『プラウダ』の編集委員、雑誌新聞協会幹部。ソ連とヨーロッパをたくさん旅し、多くの風刺的な記事、エッセイ、コラムを発表した。ソ連の最も有名なジャーナリストだった。1937年以降、ソ連最高ソビエト代議員。1936年から1937年に『プラウダ』の特派員として、内戦中のスペインに派遣され、特派員経験を基に1938年に『スペイン日記』を出版した。ところが1938年12月14日に逮捕され、1940年2月1日に反ソビエトおよびテロ活動の罪で死刑判決を受け、翌日銃殺された。1954年12月18日に復権されている。

コリツォフの『スペイン日記』については、小野理子氏の翻訳書がある。小野氏はコリツォフを高く評価しているが、残念ながら訳は前半のみ（しかも部分訳）で、後半部分は全く訳出されていない。私は以前、このことについて触れ、後半部分の中でも、最も生き生きとスペインの動きを記している部分を訳出した。

あまり知られてはいないとコリツォフを評したが、彼が若くして死に、長い間タブーとされたことがその理由だろう。復権され、さらにペレストロイカ期に一時的に盛り上がったものの、未だに研究は進んではいない。ロシアのネット通販サイト「オゾン」で調べても、2000年以降のものはなかった。

唯一2009年出版のザレススキー著『ソ連史の中のフーズ・フー、1924-1954年』のコリツォフの経歴は興味深い。粛清の原因等について、直接的な証拠となるものはないが、これまで全く知られてなかったこと、すなわち内務人民委員部の幹部たちと密接な関係にあり、内務人民委員部によって組織された海外での扇動に参加、一時的にスターリンの後ろ盾を利用していたことを挙げている。さらにコリツォフがエジョフを弁護する記事を『プラウダ』に発表、これを受けてヴォロシロフが発表前のさらなる記事（原稿？）を入手、それとメモをスターリンに送り、記事の発表を差し止めるよう促し、その後「Kを処罰する」という命令が与えられたという。

真実なのかどうかは疑わしいが、それでも『スペイン日記』を一度読めば、コリツォフの幅広く、そしてきめ細やかな取材活動の様子、危険を顧みずにどんな場所にも入っていく姿勢がわかる。まさにジャーナリストの鑑といってもよい存在だった。このことだけは決して変わることはない。

ワルツ王ヨハン・シュトラウスとロシア（その2）

畔上 明

現在のパーヴロフスク駅（コンサート・ホールのあった駅舎は第二次世界大戦中に破壊された）

ヨハン・シュトラウス2世が初めてロシアを訪れたのは1856年5月30歳の時、7年前に世を去った父ヨハンの楽団を引継いで多忙を極めウィーンから距離を置きたいと思った矢先でもありました。「ツァールスコエ・セロー鉄道会社」の依頼によりコンサートの仕事を引受けての旅立ちが、ロシアとの長いお付合いの始まりです。1837年サンクト・ペテルブルクから郊外のツァールスコエ・セローを経由してパーヴロフスクまで鉄道が敷かれ、その終点のパーヴロフスク駅構内のレストランで毎年夏に音楽イベントが行われていたのですが、その指揮者としてヨハン・シュトラウスが招かれたのです。

ウィーンから12人の音楽家を伴い、ロシアで残りの演奏者を選び、シュトラウスのワルツやポルカだけではなくグノー、ワグナー、ヴェルディの紹介、そしてロシアのグリンカなどのコンサートを行いました。演奏会は大成功でパーヴロフスク駅のレストランはコンサート専用のホールに生まれ変わり、鉄道会社は2年間の契約を提案してきました。1856年11月にサインした契約によって当初1858年10月までを期限とするロシアでの生活は、円熟期のシュトラウスにとって楽しく思い出深い日々でしたが、その最後の年にオリガ・スミルニツカヤという女性と恋に落ちます。二人の間には100通もの手紙が交わされ、オリガ自身も作曲に手を出すのです。契約切れの日が近づくにつれ、延長出来るとは思っていなかっただけに、この二度とないであろうと思えた「詩のような恋」から身を引くことはつらく切なく感じられてくるのでした。その時の思いを作曲したのがワルツ「サンクト・ペテルブルクとの別れ Op. 210」（1858）です。

10月半ばにパーヴロフスクでの最後の演奏会を終えたシュトラウスは、先に楽団をベルリンに送ったあとアレクサンドル2世の要請にもとづいてモスクワへ行き、ボリショイ劇場で3回コンサートを開くことになります。ところが初回が不調に終わったためにあとの2回はキャンセルとなってしまい、ベルリンを経由してウィーンへと寂しい帰国となったのでしたが、その途上でパーヴロフスクでのシュトラウスのコンサートを1859年60年の2シーズン延長するとの知らせを受けたのでした。シュトラウスのこころは既に、ロシアの思い出、オリガの思い出をワルツの中に封じ込めて別れを告げていたため、寝耳に水の感がなくもなかったことでしょう。ペテルブルクとの別れを奏でるワルツは憂愁をおびたチェロ独奏で始まりますが、出だしのチェロのメロディーは、アレクサンドル2世の弟コンスタンチン大公とミハイル大公のことを示していました。 ヨハン・シュトラウスはロシア滞在中に皇族と知己を得る機会を持ったのでしたが、とりわけお二人の大公は、パーヴロフスクのコンサートにチェリストとしても参加されたこともあり、一層親しくなったのでした。

オリガとの恋の行方は、とどのつまり結ばれることなく破局を迎えます。

（「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー）

モスクワ「ムゼイ」巡り・その31

バーチャル版ムゼオン美術館

大矢 温

「ムゼオンＭＵЗＥＯＨ」美術館、聞きなれない名前かもしれない。「モスクワ屋外彫刻美術館Музей скульптуры в Москве под открытым небом」が正式な名称だが、トレチャコフ美術館新館の前の屋外展示場、といえば「ああ！」と納得する方もいるかもしれない。ここには今となっては懐かしい、ソ連時代の各種のオブジェが展示されている。鼻の欠けたスターリン像やペンキを投げられた初代秘密警察長官ジェルジンスキー像など、オブジェの一つ一つに重々しい歴史が刻まれているのだが、ソ連が崩壊してから30年以上が経過した今となっては、それらの歴史も過去へと遠ざかり、モスクワ市民の散歩コースとなっている。

秘密警察の本部があったルビヤンカ広場に立っていた初代長官Φ．ジェルジンスキー像。ジェルジンスキー自身は革命初期の混乱期にチェーカー（反革命・サボタージュ取り締まり全ロシア非常委員会）と呼ばれる秘密警察を率いて反対派を容赦なく処刑したことで恐れられた。この像は1991年8月に起きた保守派のクーデター未遂事件の時に市民によって倒されたもの。

右手の女の子たちの向こうに見えるのはЯ．スヴェルドロフ。この人もレーニンの片腕として革命初期に農村からの強制的な食糧徴発や反革命勢力に対する赤色テロルなど、恐怖政治を主導したことで知られる。この像はソ連時代にスヴェルドロフ広場（現在の劇場広場）に立っていたもの。銅像の起工式ではレーニン自ら礎石を置いたというソ連時代の「聖地」の一つ。

ご存じ、スターリン。1930年代に大量粛清を行い、無実の人々を大量に虐殺した独裁者、というのが一般的な評価だが、大祖国戦争（第二次世界大戦）を勝利に導いた英雄、という評価も一部の岩盤支持層では根強い。この像は多分、トレチャコフ美術館の前、現在トレチャコフの石像が立っているところに立っていたものではないかと思う。

（札幌大学地域共生創学群教授）